

2 章 2017 年度 COC 事業による「教育」

コラボ教育

継続看護の実習

大学院科目

COC事業における教育改革

- ・地域貢献活動の一部を教育課程に取り入れ、市内で高齢化率の高い地域で授業を展開する。
- ・継続看護を実践する専門看護師を招聘し、継続看護に関する基礎を学び、看護実習において継続看護の実践を学ぶ内容にする。
- ・訪問看護の知識、理解を深めるために、在宅看護分野の講義、演習、実習の時間数を拡大、内容を充実させる。
- ・医療機関や多職種連携を推進できる教育プログラムを開発する（大学院生対象）。



（人材育成型 卒業後の学生のイメージ）

1. 地域住民の暮らしを理解できる看護師
2. 病院や施設でのケアと在宅ケアの接続を計画・実行できる看護師
3. チーム医療のコアとなる専門看護師（大学院生対象）

1. コラボ教育

住民の方との「コラボレーション（協働作業）」による教育として、2009年度より、地域住民の方が「教育ボランティア」として、概論・演習科目において模擬患者や経験談を語っていただく講義を開講している。本事業では、卒業生全員が「地域住民の暮らしを理解する」ために、より住民の暮らしに近い場所で、住民に参加いただく授業を2014年度より須磨区北部において開講している。2017年度はCOC事業補助金終了後に継続して実施するうえで、一部の科目では大学において実施するなど移行を目指した内容を重視してかたちで開講した。



図 1. COC 事業によるコラボ教育内容の流れ

2017 年度のコラボ教育実績

2017 年度に行ったコラボ教育の実施日など活動の実績は次のとおりである。

実施日	科目名	開講場所	対象学年・人数	住民参加人数
5 月 9 日～ 6 月 15 日	基礎看護技術演習Ⅲ	須磨区竜が台・ 菅の台	2 年・97 人	146 人 (のべ 200 人)
5 月 9 日	健康行動論	須磨区菅の台	4 年・24 人	※8 人
5 月 31 日	健康学習論	大学	3 年・29 人	35 人 (うち須磨区から 3 名参加)
10 月 4 日	基礎看護技術演習Ⅰ	大学	1 年・95 人	30 人
12 月 19 日	ヘルスプロモーション論	大学	1 年、編入 3 年・104 人	30 人
2 月 9 日～ 2 月 23 日	健康生活支援学実習	須磨区竜が台・ 菅の台	2 年・16 人*	16 人

*履修者のうち、須磨区で実習を行なった学生数

※学生がインタビュー、アセスメントを行った住民数。基礎看護学技術演習Ⅲと合同化開講したため、インタビューに協力くださった住民数は 16 人。

各コラボ教育の概要

➤ 1 年生科目

【基礎看護技術演習Ⅰ】



◆ 教育内容：「眠りを見直そう」をテーマに、人にとっての休息、睡眠の意義や睡眠のメカニズム、生体リズムについて講義を 45 分行った後、大学生の生活と地域生活者の生活の比較を通して、生活リズムと生体リズムについて学生と住民さんで意見交換を行うグループワークを行った。

◆ 学習課題：

1. 事前課題「就寝前、起床時の体温を測定して記録する。1 日の生活行動を記録する」
2. 事後課題「自己の生活リズムと睡眠について、考察する。」

◆ オプション企画：活動量計を 2 週間装着し、睡眠分析の結果を個別に紙面で提供した。

◆ 住民からの評価（アンケート回収率 100%）

<講義>とても有益だった：50.0%、まあまあ有益だった：43.3%

<グループワーク>とても有益だった：43.3%、まあまあ有益だった：40.0%

◆ 学生からの評価（アンケート回収率 100%）

<講義>とてもわかりやすかった：83.1%、まあまあわかりやすかった：17.9%

<グループワーク>とても有益だった：89.5%、まあまあ有益だった：10.5%

◆ 担当教員からの感想

本授業科目は1年生が初めに履修する技術演習科目で、「看護行為に共通する技術および健康的な日常生活行動を促進する基礎的な援助技術について、その知識と方法を習得する」ことをねらいとしている。「休息・睡眠を促す援助」の単元である本企画は、生体リズムに関する基礎的な知識を得て、ひとの健康生活の柱のひとつである「休養」の意義を理解し、異なる世代との交流を通して各々の生活リズムの特徴を知り、課題や工夫について共に考えることを目標に実施した。

グループワークは、住民さん1名と学生2～3名のグループを作り、学生の進行で行った。学習方法としてのグループワーク経験が少ないうえ、世代の異なる人とのコミュニケーションの機会が少ない学生達ではあるが、少人数でグループ構成したことにより意見を出しやすく聴きやすい環境ができ、住民さんの協力を得て活発な情報交換がなされていた。学生は、昨年までと同様に、多くの住民さんの生活リズムが規則的で、目的的な活動を生活の柱にしながら、社会活動を継続して日々充実した生活を送っていることを知り、自分たちとの違いに驚くと共に貴重な経験ができたと感じていた。また、その人の生活を理解することがひとを理解するために重要であることを実感し、同時に自分の生活を見直したいとふりかえる学生も多かった。住民さんは、講義を通じて睡眠に関する知識の深まりを感じ、その大切さを再認識されていた。グループワークでは、学生と話す機会自体を楽しみ、生活リズムの違いに驚きながらも学生を気遣う声が聞かれた。また、自分の生活の様子や工夫について話すことが、自分の気持ちの整理や生活をみなおすきっかけになった方もおられた。(以下、アンケートより抜粋)

- ・ 講義で知ったことを今日から実行します。
- ・ 睡眠というのは、究極的に個人的なことだと思っていたが、数を集めれば傾向というものがあり、社会全体で見れば睡眠を改善することで作業効率が上がったり、健康度を高めたりするのだと改めて思った。
- ・ 学生さんのみなさんの生活がわかり、自分の若い時代のことを思い出した。学生さんたちの睡眠時間が十分ないことに、これからの身体や精神面のことが少し心配になった。
- ・ 学生さんと話せて、とても楽しいひと時を過ごせました。

以上より、学生、地域住民両者にとって、有意義な企画であったと考える。

オプション企画「睡眠計測」に参加した住民は15名で、「自分の睡眠状態がわかった」「測定期間中は規則正しい生活を維持できた」「結果を得て、生活について意識できた」などを参加したメリットと感じていた。一方で就床・起床時刻を記録することや活動量計をつけていることに意識が向くことを「大変」だと感じていた。授業に参加した30名のうち、25名(83%)は今後睡眠計測に参加することを希望しているため、その折には参加に伴って生じる不都合について、具体例をあげて十分伝える工夫が必要である。

平成27年度から3年にわたり、およそ90名の地域住民の方にご参加いただき、本コラボ授業を開催してきた。今後は、形を変えて睡眠衛生の情報発信を行うと共に、地域住民の暮らしを理解できる看護師の育成に尽力したい。

(基盤看護学領域基礎看護学分野・准教授 柴田しおり)

【ヘルスプロモーション論】

- ◆ 教育内容：「ことわざで知る健康の知恵」をテーマにした教員の講義を、教育ボランティアと学生が合同で聴講する。聴講後、グループに分かれ教育ボランティアと学生とで「健康に関する先人の知恵を、自身の健康増進に役立てているか」「自分が健康行動をとろうとするきっかけ（理由）は何か」について、意見交換する。
- ◆ 学習課題：地域の人々はどのような方法で、自らの健康をコントロールしているか？またその人たちの健康を維持・増進するために、看護職者としてどのような働きかけが必要か？教育ボランティアとの意見交換から学んだことをもとに、自分の考えを述べる。
- ◆ 学習の成果（学生レポートから一部抜粋）：
 - ・地域の人々が健康を維持・増進するためには、その人が今まで生きてきた時代背景や生活背景を踏まえ、働きかけることが必要である。
 - ・無病にこだわらず、病気があってもそれをどのように受け入れて、その病気と付き合いながら生きてきたかを考えることが大切であり、それが個人の QOL の向上につながると思った。
 - ・話しを聞いた 2 人は自分でどうしたら健康を保てるか考え実行していたが、家に閉じこもってしまう人、健康のための習慣が続かない人など高齢者は千差万別なので、その人に適した援助が必要だと考える。
- ◆ 教育ボランティアからの評価：

講義内容の満足度・・・「とても満足」12 人、「まあ満足」10 人、「少し不満」「とても不満」それぞれ 1 人

学生との意見交換・・・「とても満足」10 人、「まあ満足」9 人、「少し不満」7 人、「とても不満」1 人

「意見交換としては時間が短すぎる」「講義は老化防止に役立てた」

◆ 担当教員の感想：

ヘルスプロモーション論でのコラボ教育は今年で 4 年目となります。最初の 2 年間は、須磨区に出かけての演習でしたが、前後のカリキュラムの関係上、学生と参加される住民さんとの意見交換の場が持てなかったため、昨年度から大学に近い場所としてユニティ、そして今年は学内に変更し、学生との学び合いの場を設けるようにしました。



教育ボランティアには事前に「健康に関する先人の知恵を、自身の健康増進に役立てているか」を考えてきていただき、学生とのディスカッションのテーマにさせていただくよう企画していましたが、限られた時間であったため十分な話し合いができなかったのが残念でした。また参加された教育ボランティアの半数近くが 4 回以上、教育ボランティアとして参加されています。学生がもっと積極的に意見交換に参加してほしいとの声もありましたので、教育ボランティアからの一方方向の会話にせず、双方向でお互いが学び合えるようになってほしいと感じました。（地域連携教育・研究センター 相原洋子）

➤ 2年生科目

【基礎看護技術演習Ⅲ】

- ◆ 教育内容：地域住民にヘルスインタビューと健康測定（「栄養系」「運動系」のいずれか）を実施し、対象者の生活と健康状態の関連について考察する。
- ◆ 演習日：計8回（2017年5月9日（火）、11日（木）、18日（木）、23日（火）、30日（火）、6月13日（火）、
- ◆ 演習場所：須磨区（竜が台地域福祉センター、菅の台地域福祉センター）
- ◆ 学習課題：学外演習記録「観察・測定結果やインタビュー内容を整理して記録する」レポート「インタビューを行った対象者の生活と、健康状態や健康に対する考えとの関連について考察する」
- ◆ 学習の成果
 - 評価：「良く達成できた」46.8%、「達成できた」41.7%、「まあまあ達成できた」11.5%
- ◆ 学生の感想（ミニカンファレンス記録より一部抜粋）
 - <コミュニケーションのとり方を学んだ>
 - ・ 普段の生活を聞くことで、そこから話を広げることができた。
 - ・ 話し好きな住民さんには話が聞けるが、話しが苦手な人からの情報をどのように集めればいいのかと思った。
 - <計測値の捉え方や説明の仕方を考えた>
 - ・ 一般的な基準値だけでなく、その人のいつもの値に注意することが大切だと知った。
 - ・ SpO₂の値が低く住民さんも心配そうだったが、自分だけではどのように声をかけたらよいか分からず困った。
 - <知識の必要性を実感した>
 - ・ 計測値が高いときに、住民さんにどのように返せばいいのかわからず、自分の準備不足を感じた。
 - ・ 計測値について、曖昧にしか返せなかった。値について自分で判断するのに困った。
 - <この演習に参加する住民の期待を知った>
 - ・ 血圧を測定するのは、前年度のこの演習以来だという方がおられ、学生が測定する値を頼りにされていることが分かった。自分が測る重みを知り、技術面を磨かないといけないと思った。
 - <住民の暮らしぶりや健康との関係を知った>
 - ・ 自分が考える50代と関わった方の生活が異なり、元気に過ごしていることを知った。
 - ・ この会場まで来ること自体がよい運動になり、友達と会うきっかけになることに気づいた。
 - ・ いつも来られている方が来ないと家の様子を見に行くと話されていて、つながりがあると思った。



◆ 参加住民の感想（アンケートより一部抜粋）

<健康チェックができてよかった>

- ・年1回来ているが、自分の体のことが知れてよかった。
- ・病院にあまりかからないので助かる。
- ・今の骨の状態がわかってよかった。食べ物、運動に気をつけたい。
- ・普段から気をつけてはいるが、あらためて改善するモチベーションがあがる。

<近所の人との交流の場になってよかった>

- ・地域でこのような機会を設けていただきありがとうございます。わざわざ出かけるのは大変だと思っている方も近くなると思える。同じ地域にいてもお会いすることのできなかった方に、久しぶりにお目にかかれてよかった。

<学生に役立ててよかった>

- ・若い学生さんが一生懸命されているのに感激した。頑張ってください。
- ・これからもこういう機会を増やしてほしい。学生の役に立てて幸せ。

◆ 担当教員の感想

今回の演習は、学生にとって学外で地域住民の方にインタビューや測定を行う初めての機会であった。ヘルスインタビューは、地域住民の生活や健康状態について知ることを目標とし、住民1名に対して学生2名で実施させていただいた。学生は生活に焦点を当てながらインタビューを行うことで、コミュニケーションの取り方を考えるだけでなく、自分たちとは年代の異なる住民の方々が、どのような日常生活を送っているのかを知ることができていた。

健康測定に関しては、測定ブースに来られた方に対して、血圧や体脂肪などを教員の見守りのもと、学生が交代で測定した。学生同士で行う時とは異なることが多いため、学生は安全に測定するだけでなく、測定方法や結果を住民の方々にどのように伝えていくのが適切なのかを考えることができていた。さらに、待機ブースで健康に関するチェックリストを記入している住民の方にも積極的にかかわることが、高齢者の生活や考え方の多様性に触れる機会にもなっていた。

（基盤看護学領域基礎看護学分野・講師 玉田雅美）

（地域連携教育・研究センター・助教 小巻京子）

【健康生活支援学実習】

- ◆ 教育内容：地域で生活する人々の中で人と関わる力を養い、人々の生活と生活の場である地域を理解し、その人にとっての「健康」とは何かを考える。また人々が健康を維持・増進するための支援のあり方を考察することを目的とする。
- ◆ 実習場所：神戸市西区10地区、須磨区2地区（竜が台、菅の台）
- ◆ 教育ボランティア人数：16人
- ◆ 担当教員からの感想

学生にとって教育ボランティアさんのスケジュールを確認するために電話をかける緊張から始まった実習であった。教育ボランティアさんを電話でのやり取りを元にその方をイメージしながら計画を立案して訪問し、お話を伺い、その方が住む地域を知るために地域を歩き回った経験は、学生の実習に取り組む様子から新鮮で刺激的だったことが伺えた。この実習を通して学んだ「人の多様性・個別性とその背景と健康との関

係、そこから考えた看護者の支援のあり方」をきっかけに「その人らしさ」を支える看護とは何か問い続け、自分なりの看護観をさらに高めていって欲しいと思う。

(報告者：地域連携教育・研究センター 小巻京子)

➤ 3年生科目

【健康学習論】



◆ 教育内容：公衆衛生看護で対象となるあらゆる世代に向けた健康教育・健康学習の一連の過程を学習することを目標とし、「企業の従業員」「成人向け健康づくり参加者」「地域の高齢者」を想定した健康教育を企画・運営・評価する。

◆ 健康教育のテーマ：学生は4～5人でグループに分かれ、6つのテーマについて発表した。

- ・地域在住の成人対象；「肩こり腰痛の原因は家事にあった！？」「生活習慣を見直そう」
- ・労働者向け；「あなたの腰は大丈夫？休むことも仕事です」「もっと目を愛して」
- ・高齢者対象；「ころばぬ先の3本の杖」「わかるふせぐ歯周病」

◆ 学習の成果：学生の振り返りから一部抜粋

「前日まで準備に時間がかかったので、早めに動いていればよかった。そうすれば内容も工夫できた」

「メモをとったり、うなずきながらボランティアさんが聞いてくれて、興味を持ってくれたと感じた。指導案、媒体作成に時間がかかり、どうなるかと思ったがボランティアさんの反応がよく、やってよかったと思う」

「健康意識の高い人が多かったので、対象者のニーズ（意識のレベル）にあわせて、教育内容を考えることが大切と感じた」

「参加者が多く緊張した。ボランティアの方が意欲的で質の高い教育にすればよかった」

「人が多くて緊張した。リラックス効果のあるストレッチを行ったが、科学的根拠の有無を質問されたので、データが重要と感じた」

「各学生がそれぞれの役割を担えた。地域の方を対象にして発表することは、学生を前にするのと違ってよかった」

◆ 教育ボランティアからの評価

- ・健康教育を受けて自身の生活に取り入れたい内容があったか？・・・31/35人
- ・健康教育発表会に参加しての満足度・・・「満足」15人、「やや満足」12人
- ・次年度への参加・・・「参加したいと思う」21人、「まあそう思う」12人
- ・教育ボランティアとして参加した動機（一部抜粋）

「学生さんらがどのように工夫して発表しているのかと思って」

「少しでも何かのお役に立てるのでは、と若い方とのお話が出来る事で自分の方が色んな面で役立つのではと思い」

「家族のこれからの健康（体調）を良くしていくためです。」

担当教員の感想：

過去2回、一部の学生が須磨区に出向いて発表を行っていたが、今年度は履修者数も

少なく、次年度以降の継続も含め大学で発表することとなった。それでも須磨区から3名の方が大学に足を運んでくださった。学生の発表に対して、ただ発表を聴くだけでなく、どうやったら分かりやすいか、(ポスターやチラシに) どのような工夫があれば参加したいと思うかなどを指摘してくださり、学生も多いに参考になったかと思う。

(地域連携教育・研究センター 相原洋子)

➤ 4年生科目

【健康行動論】



◆ 教育内容:人々の行動がいかに健康に影響を及ぼしているか、その健康行動に関連する要因は何か。住民の方の気になる健康状態についてお聞きし、どのような生活習慣が関連し、看護職者として支援していく方法を様々な理論を用いて考える。

◆ 学習課題: 学生は3人1グループとなり、1~2人の住民を対象に、基礎演習Ⅲで学生が測定したデータや生活習慣等のインタビューなど、健康相談の一連の流れを通して、対象者が自らの健康と

その要因をコントロールし、改善するためのプロセスとその支援について考察する。

- ◆ 学習の成果: レポート課題「人々が自らの健康を志向していくうえで、どのような支援を行うことが重要か。演習での実践を通して考える」

レポート点; 平均 44.1/50 点

<学生の発表内容から学習したこと>

「看護師からの指導という形式ではなく、日常生活の話を聞くなかで(対象者と)一緒に考える」

「健康行動を維持していくために、維持するメリットを考えてもらい、続けていることを認める。そして地域とのつながりや活動を確認する」

- ◆ 担当教員の感想:

健康相談における演習では、毎年度、教育ボランティアの募集に一定の苦労があった。

「普段気になっている健康のことについて、学生が相談を受けつけます」という案内で、地域住民の方に協力を募っていたが、何を相談してよいのか、という点で参加しにくい状況があった。そこで今年度は、2年生が行う基礎看護技術演習Ⅲと同じ日時、場所で、2年生が測定した結果をもとに、4年生が結果に関する振り返り、そこから健康や生活習慣に関する相談を行うという流れにしたところ、測定結果を振り返ることで会話の糸口も見つけられ、学生自身も演習がスムーズに行えていたように感じた。副次的だが、血圧測定の場面で2年生の演習を、4年生がカバーしており、上級生と下級生が合同で演習を行うことも互いの学年にとってよい機会になるのではないかと感じた。この科目では、地域住民の健康づくりにおいては、その人の教育歴や職歴、生活環境、人間関係など健康を決定付ける要因について、対象者のライフヒストリーや社会との関係を幅広く考えられることを目指した。COC事業が目標とする住民の暮らしを理解するうえで、今後は保健師課程以外の学生も履修するような働きかけが必要と考える。

(地域連携教育・研究センター 相原洋子)

2. 継続看護の実習

継続看護実習は、コラボ教育や継続看護についての講義を基盤にし、市民病院群や他の病院施設、保健センター、訪問看護ステーションなどの協力を得て実施している。COC 事業では下記の継続看護教育目標と実習における共通目標を掲げ、科目実習での継続看護視点の強化を図っている。

●COC 事業における継続看護教育目標

1. 地域における施設医療から在宅ケアまでの流れ（高度医療施設から一般病院へ、さらには在宅へ）を理解できる。
2. 退院から地域における生活の継続を考え、入院中に立てた退院後のケアプランが患者の地域での暮らしに合った内容や方法だったかどうかについて評価することができる。
3. 地域の人々の普段の生活や入院患者の退院後の生活を想像でき、施設内の看護ケアに留まらず、退院後の生活者の視点から退院計画を立てることができる。

●実習の共通目標

1. 地域における施設医療から在宅ケアまでの流れについて、システムや制度、継続的看護実践について理解できる。
2. 生活をイメージした退院時のケアを実践できる。
3. 他職種の役割や地域資源の活用について理解できる。

●継続看護に関する体験目標項目と達成度

・基礎看護学実習

体験目標項目	対象学生の体験率
地域医療推進課からの説明	100%
地域連携推進室の見学実習	0%
受け持ち患者でなくても、退院カンファレンスがある場合の参加	38.8%

・地域・在宅・訪問看護学実習

体験項目	体験した学生数（率）
保健センターにおける健康相談事業	100%
地域包括支援センターにおける同行訪問件数	学生 1 名あたり 2.3 件
〃 サービス担当者会議	60.8%
〃 退院前カンファレンス	3.9%
〃 健康相談等事業	学生 1 名あたり 1.2 件
訪問看護ステーションにおける訪問件数	1 名あたり 5.4 件
〃 サービス担当者会議	23.5%
〃 退院前カンファレンス	10.8%

・老年看護学実習

体験目標項目	対象学生の体験率
サービス担当者会議等への参加	31.0%
外出、受診、入所予定者の事前訪問への同行	0.0%

・精神看護学実習

体験目標項目	対象学生の体験率
受け持ち患者が参加するプログラムでの地域活動支援センター、就労支援センター、グループホーム等の見学、および、利用者との交流会の参加、多職種との退院支援会議多退院前訪問看護師とのケア会議等への参加、学生カンファレンスでの共有。	100%

・慢性看護学実習

体験目標項目	体験した学生数（率）
受け持ち患者の退院指導、退院支援を行う	26.5%
受け持ち患者の多職種による退院前カンファレンスに参加する	2.9%
受け持ち患者以外でも地域連携推進室が関わる退院支援の場面に参加する	100%

・周手術期・クリティカルケア看護学実習

体験目標項目	対象学生の体験率
転院・退院に向け、地域医療推進室が手術後の患者を支援する場面を見学する	19.6%

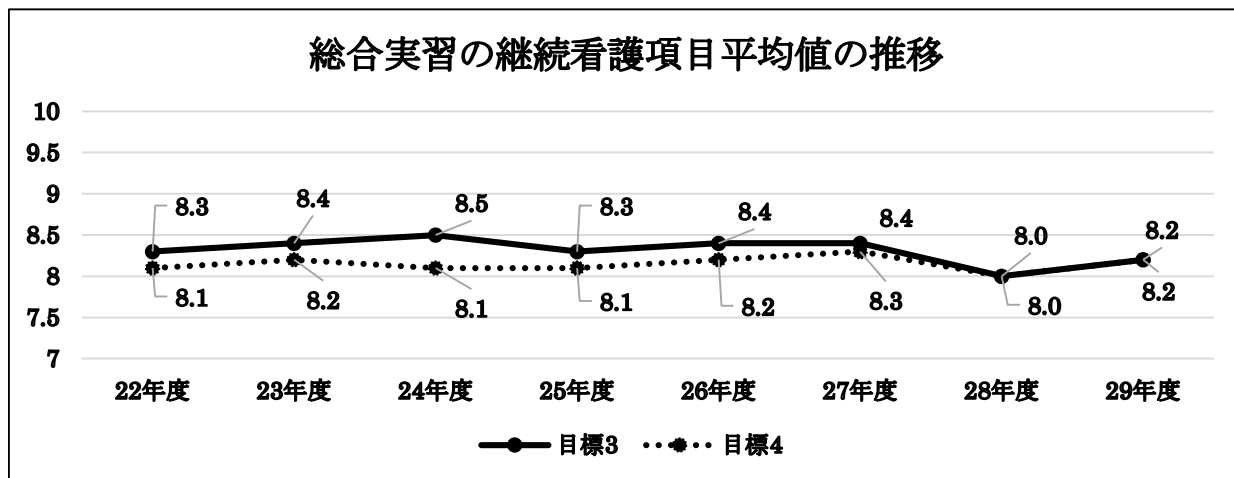
・小児看護学実習

体験目標項目	対象学生の体験率
受け持ちの子どもに対して退院支援を行う。	60（58.8%）
1日の外来見学実習	102（100%）

●総合実習における「継続看護」「他職種との連携」についての学生の気づきや理解（カンファレンス記録より一部抜粋、統合した。）

- ・退院、治療継続のために経済的負担、生活面（実際の生活状況を踏まえた）情報収集も必要
- ・多職種の連携は、業務的にならないよう情報共有や意見交流し、方向性を共有する
- ・患者が自分のニーズを理解でき、主体的にできるような関わり
- ・より安心して退院できるよう、意思決定できるよう環境を整える
- ・患者の思いを尊重した関わり、患者と家族とが互いの思いを知りすりあわせができ

るようコーディネートの視点が必要



3. 大学院科目

【コラボレーション看護論】

- ◆ 履修者数：大学院博士前期課程 1、2 年生 7 人
- ◆ 内容：チーム医療に関する考え方を学び、医療機関内の連携だけでなく、医療機関の間や医療機関と地域との連携を推進していくために必要な看護師の役割や看護管理のあり方、連携能力の育成に関わる看護教育について、エキスパートからの講義を受講し、討議・考察する。

<実践者からの講義>

- ①「緩和ケアチームの活動」 梅田節子氏（神戸市立医療センター中央市民病院 緩和ケアチーム専従、がん看護専門看護師）
- ②「NST チーム（栄養サポートチーム）の活動について」 北川恵氏（西神戸医療センター NST 専門療法士）
- ③「せん妄ケアチーム活動を通してコラボレーションを考える」 伊藤聡子氏（神戸市立医療センター中央市民病院 急性・重症患者看護専門看護師）
- ④「シームレスな医療・看護を提供するための地域連携のあり方」 宇野さつき氏（新国内科医院 看護師長）
- ⑤「看看連携を推進するためのネットワークづくり」 三輪恭子氏（よどきり医療と介護のまちづくり株式会社 地域看護専門看護師）

- ◆ 学習成果：授業最終日には、「急性期医療におけるチーム医療、地域・在宅領域における多職種との協働を推進するための看護師に求められる能力」について、授業で学んだ内容をもとに議論を行った。

[事例と検討内容]

事例 1. 70 代、アテローム型脳梗塞 意思疎通可能。麻痺のため在宅ではなくリハビリ病院への転院が進められるが、看護師から退院後の支援、病院への転院について詳細な説明がなく家族も混乱した事例。

学び：看護師として退院後の生活をイメージできることが重要。チーム医療が出来たこと

で、そこに業務委譲してしまい、本来看護師として担わなければいけないことも、専門に任せている現実がある。講師から「退院できない人はいない」というメッセージがあり、患者中心のケアについて考えるべき。

事例 2. 80 代、2 型糖尿病、認知症を有して血糖コントロール不良で入院。要介護 1 を認定されており、デイケアなど社会資源が活用できている方の自宅で暮らすことを希望した事例。

学び: 家族関係の構築も良好で支援の受け入れができた好事例として、どうしてそのような結果に結びついたのかを話し合った。講義の中で学んだ「ストレングスモデル」にあった、対象者の好ましい性質や性格を見つけることができているのと、チームの種類の点で、各専門職が協働・連携してチームの中で果たすべき役割を担いながら、目的・目標を共有することの学びから、多職種間で情報共有ができているのと、医療者が対象者をよく知っていたことが背景にあると分析した。

◆ 担当教員の感想：

コラボレーション看護論では、チーム医療と看看連携について、病院と地域それぞれのエキスパートを招聘した、8 回の講義回数ながら非常に内容の濃い講義を展開してきた。また講義では分野の異なる履修生が、自分たちの臨床経験をもとにチーム医療、多職種との協働を振り返る時間もあり、講義で得た知識を実践にどのように活かすかを考えるよい機会になったと考える。残念ながら本科目は COC 事業最終年度に伴い、今年度をもって最終となった。この 3 年間で 33 人の履修生があり、選択科目ながら多くの学生が履修されたことはよかったと思う。チーム医療のコアとなる看護職者となっていく院生が、この学びを活かして行ってほしいと思う。(相原洋子)